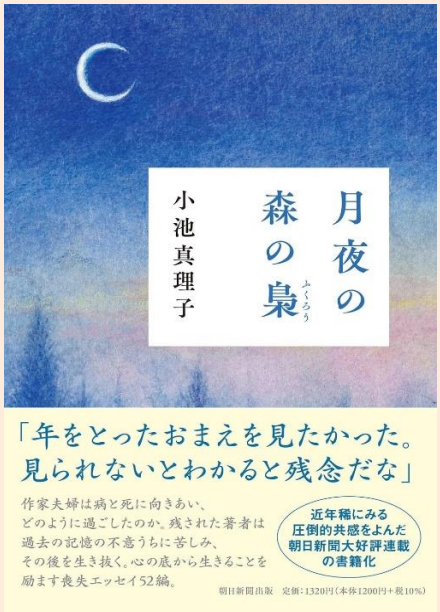
図書館員が選ぶこの一冊 96

『月夜の森の梟(ふくろう)』
朝日新聞出版　小池 真理子／著

愉(たの)しみ、怒り、哀(かな)しみ…。何もかもを共有し、互いが互いの「かたわれ」として生きてきた作家夫婦。夫の藤田宜永(よしなが)が病にかかり、二人は共に病と死に向き合うが、夫が亡くなり、妻は喪失感に打ちのめされる。その時の心の風景をそのまま言葉に換えて紡いだ、作家・小池真理子の52編のエッセー。



新聞土曜版の連載が反響を呼び、書籍化された。夫を失ったあとの空虚な生活をできるだけ客観的に、冷静につづっているが、哀しみは消えないことが伝わってくる。それでもなお、なんとか生きていくしかない残された者の言葉が、読者の胸を打つ。